

〒764-0023 香川県仲多度郡多度津町若葉町9-13
TEL & FAX 0877(33)4512

真鍋國六記

第41回 全国まなべ会 —阿波大会— 四国まんなか千年妖怪物語

日 時 令和6年5月26日(日) 15:30～

場 所 大歩危峡 まんなか

〒779-5451 徳島県三好市山城町西字1644-1
電話0883-84-1216, FAX0883-84-1218
E-mail: info@mannaka.co.jp

大会プログラム 第1日 5月26日(日)

- 13:30～15:30 受 付
14:00～15:30 全国副会長会
15:30～16:30 総 会
16:30～18:30 総会終了後
「ヘリコプター操縦席からの景色」約30分
写真撮影 休憩
18:30～21:00 懇 親 会



列車内で昼食「おとなの遊山箱」

会 費

- (1) お一人(宿泊の場合)…………… 20,000円 朝食付
(2) お一人(宿泊の場合/同伴奥方) … 18,000円 朝食付
(3) お一人(宿泊なし日帰りの場合) … 10,000円
(4) 記念写真代(1枚)…………… 1,500円
(5) 観光費 観光列車…………… 14,000円
(四国まんなか千年ものがたり) 昼食「おとなの遊山箱」(飲み物は別途)
※子ども同伴の場合の費用は、事務局にお問い合わせください。

そ の 他

- (1) 申込期日/4月25日(木)着
(2) キャンセル/5月5日までは全額返金、
以降は写真代のみ返金
(3) アトラクション/懇親会での出場希望者は
問合せ先までお申出下さい。
(4) 問合せ先/
■全国まなべ会事務局
0897-36-3652、携帯090-4331-0287
■阿波まなべ会事務局(隆資)
携帯090-3786-3232



翌日観光プラン 第2日 5月27日(月)

朝食 ⇒ 集合 ⇒ ホテル発 ⇒ 琴平駅 ⇒ ⇒ 大歩危
7:00～ 8:50 9:00 10:20 10:48 12:48
(観光列車(四国まんなか千年ものがたり)乗車
列車内で昼食「おとなの遊山箱」(飲み物は別途))

■午後の部(大歩危駅到着後)

①祖谷のかずら橋コース

大歩危駅 ⇒ 祖谷のかずら橋 ⇒ ホテル
13:00 13:30 14:30 15:00
(マイクロバス)

②大歩危峡船下りコース

大歩危駅 ⇒ 大歩危峡まんなか船下り(ホテルの近所)
13:00 13:20 15:00

(天候により欠航となる場合があるため、希望者は当日、現地で
お支払いください。大人1,500円・小人750円(税込) ※3歳～小学生)

③帰路観光列車乗車「四国まんなか千年ものがたり」コース 折り返し発車まで自由行動(約1時間30分)

大歩危駅 ⇒ ⇒ 多度津 ※多度津駅で岡山・
14:21 17:14 松山方面へ乗り換え

(時間的に「かずら橋」「船下り」には参加できません。3両それぞれ
造りの違う内装をお楽しみください。
※列車内への持ち込み飲食は不可です。列車内の飲食サービス
をご利用ください。(料金別途)

阿波の歴史と観光巡り

ここ数年の停滞社会から、明るい光明が差し込んできたようであります。今回三好市を中心に、第41回目の全国大会を開催します。長い歴史と文化を育んできた当地を巡ってみましょう。



四国まんなか千年物語

この四国にある観光資産を紹介するため、JR 四国では新しく設えた観光列車を走らせ楽しい時間による心のリフレッシュを試みております。今回私たちが利用する列車は、「四国まんなか千年物語」として皆様にご乗車いただき、素敵な美味しい食事をいただきながら、車窓からは美しい溪谷の美を

堪能できるようになっています。また合せてこの地域の民話や歴史の綾を存分お聞きしながらお楽しみください。

(坪尻駅の急こう配)

琴平から坪尻駅周辺に来ると坂の勾配が急になってくる。動力の小さい機関車では、いったんそのまま伸びる線を進み、一旦そこで止まる。そこから逆に引き込んでいる勾配の付いた線路を来た方向と逆に上へ走行して行くのである。勾配を付けた線路の敷設によって、物理的に緩やかにした線路をまた元の通りに前に走り出すのである。まずは一見に如かず。急こう配とフィードバック走行は九州地区の某JR線でも見られる。



坪尻駅

(金毘羅さんの奥の院である 箸蔵寺のこと)

金毘羅さんの建物の中に掛けられている絵巻物の中には、金毘羅さんと箸蔵寺との秋の大祭に關係した祝宴に関する行事を表現した変体仮名の説明文がある。面白い説話であり、解説された方がおられるがわたしにとつては、その意味が分からず大変難解なものであった。先の阿波会長(克敏)さんの父である「真鍋忠雄」さんは、長らくこの寺の檀家総代をされていた。またこの寺の前僧侶は仁和寺の門跡をされていて、京都で全国まなべ会大会が開催の折に皆で説話をお聞きしたことがある。

※絵巻物の名称:

「讃州象頭山正祭頭騎大略図」

「京極」第11号

松田房徳 記

(人工の池田湖のこと)

水不足に悩んでいた香川県へ水を送水するために、水量調整をする人工的につくられたダム湖である。このダムではボートやカヌーの練習に最適である。吉野川を上って行き、高知県本山の方の溪谷を堰き止めて「早明浦ダム」が建設され、香川県の水不足解消になっ



池田湖

た。いわゆる香川用水と言われるもので、高知、徳島両県からの恩恵を深く受けているのである。

(阿波の「真鍋屋」のこと)

そもそもこの真鍋屋は、蜂須賀家が阿波に入ってから約十年遅れて池田にはいったものである。蜂須賀に頼って最初から随伴して当地へきたら良かったのですが、尾張での都合もあって早く参加できなかったものである。この真鍋氏は、徳川のお側用人をしていた間部詮房と同系統の人達である。蜂須賀の殿様から西の阿波地域である池田での事業を許され、ここで土着したものである。江戸時代にはここでタバコを製造していた三軒のうち二軒が真鍋氏であった。このうちの一軒の工場が残っているが、この建物は今も資料館として、



真鍋屋 築100年超の古民家を改装した

この市内において一般に開放され見学ができるようになっている。一方の「真鍋屋」さんは、醸造業をされていて、近くの建物にはレストランと宿泊施設があり、一般客に解放されている。また先の「タバコ製造」をやっていた「真鍋屋」の二軒東隣りは、野球で有名な蔦監督の家である。蔦家は作った刻みタバコを卸売していたお家である。蔦監督のお孫さんは、現在活躍しておられる新進の映画監督である。

(大歩危溪谷周辺の気象と地質)

ここ大歩危地域や伊予の新宮辺りの谷の深い地域の気象状況は、大変変動の大きいものである。かのノーベル物理学賞を受賞された「真鍋淑郎」先生は伊予新宮のご出身であるが、ここ三好市山城地区からも地

球物理学の気象学者が出ている。かつて岡山大学の物理学科の教授だった大滝英治氏である。池田高校のご出身ではなからうか。

大歩危あたりの周辺溪谷については、地質学上特に面白い研究サンプル対象となっている。岩石の生成や成分などから地球深部の変動が理解できるのではなからうか。

大歩危溪谷は国際的にも有名な地質学のメッカとして有名で、この地での研究から日本列島の誕生についての重要な知識が得られると言われている。大歩危の近くに色々な岩石を展示している「石の博物館」があるので参考になる。また東京あたりから現場調査と研究のため若い研究者がこちらに赴任してくる。研究して実力を積



石の博物館

んでは、また東京の大学に帰っていくのが一つのコースともなっているのである。

（祖谷のかずら橋と平家落人屋敷）

この幽谷の地は、源平合戦で落人となった平家関係の人達が隠棲した場所としても有名である。源氏の追及は厳しく、もし追ってくれば架けたつり橋を切って落とす防禦のための橋であつた。この祖谷地方や、土佐の横倉山そして伊予の切山などが四国で有名な平家落人の里である。ここ祖谷では「平



かずら橋



平家屋敷民俗資料館

家屋敷民俗資料館」があるので見学されては如何でしょうか。

（阿波の歴史上の人物たち）

源平合戦の後には東国から源氏に関わる武家たちがやってきた。特に承久の乱後は東国の武士が守護や地頭として阿波に進出してきている。特に従来の莊園支配と地頭の支配権が衝突するなど複雑な支配権の軋轢が発生することになる。阿波は当初佐々木氏の後に甲斐源氏の小笠原（長清）氏が入り、鎌倉時代は小笠原氏の支配下にあつた。この小笠原氏から同系の三好氏が守護代として台頭してくる。一方守護職細川氏内の内紛により、その後は、三好氏が近畿や四国で支配権を拡大して、天下を取ることもなる。その後四国では、長曾我部の支配、そして後には四国は豊臣の政権下に入る。しかし全国制覇を遂げた豊臣であったが、関ヶ原合戦、大坂の陣で勝利した徳川家康の御世となる。

さて、大坂冬の陣で徳川に就いていた蜂須賀家は阿波一国の領地権を与えられて、蜂須賀家政が阿波に入ってくる。しかし、入国してきたおりに、父の家正は、領国支配には特に阿波の「国衆」対策に留意するよ

う注意を促している。父は稲田太郎兵衛尉ら七人の重役に対し貢献養成の書信を出している。その後江戸末期まで蜂須賀家は阿波で継承されてきた。

（幕末の藩政混乱）

いわゆる庚午の変（稲田騒動）が維新後早々の明治初期に起こっている。本家藩武士は分藩の稲田家の武士を一段見下した態度をしていた。客分と見なしていたのである。稲田家中は、禄高のわりに人数を多く抱えていたから、明治政府の財政事情もあり、稲田家中の人達は新政府下においては士族に列せずに、その下の卒族に処遇されていた。積もり持っていた鬱憤もあり、尊皇派の稲田家中は士族としての処遇を新政府側に働きかけていた。そうこうするうちに、最終的には稲田家中は徳島藩からの独立を意図している。徳島藩側は疑念を持っていた。その中の急進派の一部が淡路の稲田家とその家臣の家々を襲撃し、また一部は徳島の稲田家屋敷、また、脇町周辺へ進行していた。この一連の騒動では、関係者の処分があつた後、結局は稲田家側に対しては、この事件を口実に北海道静内と色丹島への配置を与

えるという名目で、兵庫県管轄の士族として移住開拓を命じた。
*北海道静内移住開拓については船山薫の小説「お登勢」などに描かれている。

*NHKで上映されたテレビ映画の主演女優は沢口靖子さんでした。

（浮世絵師の東洲斎写楽のこと）
江戸時代の浮世絵師の写楽はわずか十か月の間に役者絵



や相撲絵などの作品約百四十点を残して忽然と姿を消している。1997年にはNPO法人の「写楽の会」は、写楽の正体としていままで有力視されていた徳島藩の能役者の斎藤十郎兵衛の実在を裏付ける過去帳を発見したと発表している。写楽は十郎兵衛が定説であると発表した。

*令和4年12月10日、
読売新聞より



各地からのお便り

関東から

この度、令和五年十一月五日に関東まなべ会の地区役員会を「築地日本海」の千葉駅前店で開催した。関東まなべ会は平成二十七年の熱海大会以降、令和元年までの五年間は毎年会合を行っていた。しかし令和二年から令和四年までの三年間は、コロナ禍での不開催を経て、今回やっと四年ぶりの役員会開催に至ったものです。そこで今回関東まなべ会の結束を固め、一層活動を盛り上げるための方策を五時間近くに及ぶ話し合いとなった。出席者は全国まなべ会の梅美会長、東京からは武会長、尚孝顧問、美紀事務局長、千葉からは元與会長、神奈川からはゲストとして彰さん、埼玉からは透会長の総勢七名でした。

この会合の冒頭に静岡会長の梅美さんが昨年五月の岡山大会で、全国まなべ会会長に選任されたことが報告された。またこの選任により、関東五地区の中において三地区での役員改選も行われたことが報告された。その後、出席者により熱心な討議が行われたが、大きな議題は次の二つであった。まず第一点は、昨今のコロナ禍で薄らいでしまった関東まなべ会の結束をどうするか。第二点目は、今後どのような方法で一人でも多くの方にまなべ会の存在を知っていただき、会員になっていただくか、の問題点であった。

この問題点については、次の阿波大会には、関東地区から多くの参加者が集まるように機運を上げること、また、関東まなべ会独自のホームページの開設などのSNS方式による広報活動の強化などが話し合われた。

阿波から

本年度の全国大会は、阿波まなべ会の担当により執り行われることになっている。このため昨年から本部役員をも交えた会合が数回持たれてきた。

今回例会の年度総会は、建国記念日の2月11日に東三好町の和食割烹店「藤本」で、第45回美馬大会として実施された。

この度の全国大会は「四国まんなか千年妖怪物語」というキャッチフレーズをうたっている。JR四国の豪華列車を借り切つての演出もあり、通常の生活をリフレッシュできる企画もあるため大いに期待してください。

また本年一月一日付けにて、阿波の全国まなべ会特別顧問をされている眞鍋修氏が「瑞宝双光章」受賞されました。長らく教職に従事されていた後には、美馬市の教育委員長、教育長などを歴任され、地域貢献をされて来られました。また、わたしたちまなべ会活動にあつては、第8代会長として全国活動にも貢献されて来ました。この欄をお借りしてお慶びと感謝の意を表したいと存じます。



岡山から

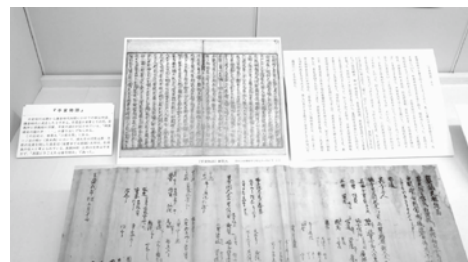
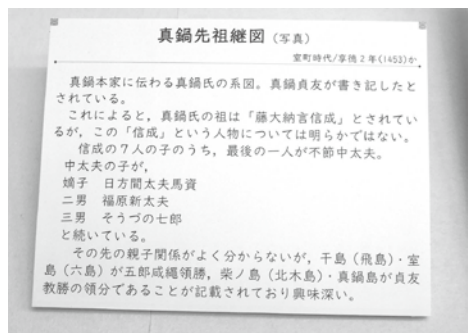
昨年の10月7日から12月10日にかけて、笠岡市立郷土館企画展が開催された。展示題目は「真鍋島歴史展」であった。展示資料は次の三つのテーマに分類されたものである。

- ① 中世の真鍋島
- ② 江戸時代の真鍋島
- ③ 明治時代から昭和時代の真鍋島

また展示の総括説明では次のように簡潔丁寧な文章が冒頭に記載されていた。

「真鍋島は本州と四国のほぼ中心に位置します。一帯の海域では村上海賊ともゆかりのある真鍋氏が活躍するなど独自の歴史を持つ島です。また、江戸時代から明治にかけての古文書が数多く残され、当時の様子をつぶさに知ることが出来ます。」

この企画展では、世界の真鍋氏



に関する資料、近世の古文書や絵図、真鍋島の古い生活や伝統行事を伝える画や古写真などを展示して真鍋島の豊かで奥深い歴史をご紹介します。」

今回の展示作品の多くは、玉野市宇野におられる真鍋氏の保有される古文書などであるが、真鍋島をルーツとする真鍋諸氏の古文書の意義や価値については中公新書の「古文書返却の旅」に既に取り上げられている。また歴史を学ぶ人たちにとつては、必須の書籍と言われている。少し写真で紹介いたします。

静岡から

熱海市の「富士山と末代人・熱海の会」

はこのほど、末代人供養と法要を伊豆山の「末代人宝篋印塔」と日金山東光寺で開いた。

県内外から約30人が参列し、富士山の山岳仏教を定着させた僧の末代人を偲んだ。



読経中に線香を手向け、手を合わせる参列者

宝篋印塔は、日金山東光寺から岩戸山に向かうハイキングコースの脇にある。1814(文化11)年に当時の般若院住職が千年遠忌として建立したとも言われる。この会の会長である真鍋梅美さんは「日金山から伊豆山権現への道を修験者の歴史の道にしたい。美しいこの道を熱海の人知ってほしい」と話し、参列者に感謝した。

末代人は駿河の出身で、走湯山で修業を重ねた。1132(天承)年に富士山に初登頂し、その後も富士山に登り、山頂に大日寺を建立したとされる人物である。

*令和5年9月27日の熱海新聞、伊豆毎日新聞より引用

東京から

このほど、東京まなべ会事務局長の美紀さんからメール便のお便りをいただきました。彼女は国際親善でも活躍されていて、ベトナムの友人と交流をされています。その女性は長年にわたり日本(岡山)とベトナムとの交流において、コンサルタントとして橋渡しの役目をしておられ、ベトナムの勲章も受賞されている素敵なお女性です。

昨年の5月には、両国の交流40周年記念岡山大会が行われましたが、その時彼女の友達周辺にも広く大会開催をPRしていただきました。ベトナムの彼女は、わたしどもの「全国まなべ会」活動の話題に非常に興味を持たれ、また、他の方がたも同族活動を珍しがって、ルーツが判るなんて羨ましいと感嘆していました、という文面でした。また今年(2024)は日本とベトナムとの国交50周年を迎えることになりました。

ハノイで行われる「日本桜まつり」では、ベトナムの女性たちの着物着つけイベントに、着付け担当の協力を何度もさせていただいたようです。



この中から写真の一つ二つを紹介掲載いたします。両国間の心温まる交流に関与でき素晴らしい仕事をされていると思うと感激いたします。

*ベトナムと岡山大学の医学部とは早くから連携協定を結んでいて、医学を極めるために若い人材の交流をしている。



オーストリアから

昨年末には、EUのウィーンに在住の友子さんからお手紙を頂戴しながら今日に至りました。ご返事せずに、この会報誌の上でお詫びと返礼を申し上げます。

頂いたEメールの中には、寅年に誕生された初孫さんNuno君や皆様のお写真が掲載されていました。もうすぐ誕生日を迎えられるとのこと、健康やかに成長され、にこやかな笑顔で大人たちに振りまいてくれる光景は、わたしにも充分想像させてくれ微笑ましく思いました。成長の段階を追ってのお写真、誠にありがとうございます。

さて、わたしのほうも多忙の中、会報誌作りのため話題のネタ収集に勤めております。ただ後期高齢者にたがわず、運動不足で少し長く歩くと関節と筋肉に負担がかかって痛くなることもあり、す。しかし気持ちだけは強く持っているせいもあり、



りしますとともに、世界が安寧社会になるよう祈念いたしましてお礼の返事とさせていただきます。 不一

国内政治社会や大国の覇権主義に強い関心を持っています。皆が幸せで高い文化社会の国に、それぞれの国がならなければならないのに、世界各地でドンパチを繰り返す野蛮人がいることを大変危惧する次第です。コロナ問題も日本では第10次の感染拡大となつていますが、不都合な情報は公開しないくらいがあります。でもヨーロッパ諸国は、まま個人の人權を重視する国ですが如何なものでしょうか。

今後も色々国際情勢の変転する時代ではありますが、これからは危機管理意識を持つて、社会監視と自己管理に留意して進みたいと思います。

駄弁を弄しましたが、ご家族皆様方のご健勝ご多幸をお祈りします。

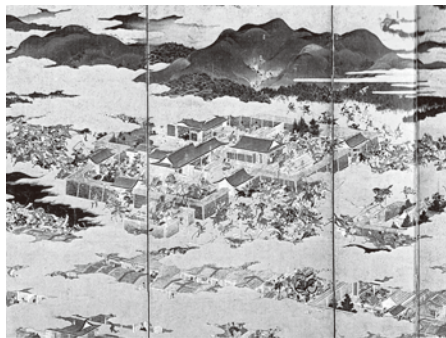


阿波に係わる歴史探訪

阿波は近畿大阪に近く、古来より関係を深く持っていたことにより、歴史を垣間見える土地でもあった。そこで関心を寄せたくなる幾つかの歴史探訪を試みてみたい。

(一) 保元の乱エレジー

まず平安時代後期の保元の乱に焦点を当ててみたい。これについては阿波まなべ会会報第59号に郷土史家で、わたしどもものまなべ会の理事をされていた真鍋利夫様の寄稿文書が掲載されている。「崇徳院皇妃―阿波の内侍―である。保元の乱(1156)は、鳥羽法皇が近衛天皇の跡目に、後白河を即位させた



保元の乱

ことである。しかし崇徳院は我が子の重仁親王を皇位に願っていて遺恨を抱いていた。しかし鳥羽法皇崩御から八日後に、後白河は夜討ちをかけて崇徳院を失脚させたのである。この乱後には平清盛が勢力を台頭させることとなる。この時の実質的な計画的実行者は信成(俗名藤原通憲)であった。後白河の側近である信成は後白河の実権利者であるが、反対に息子の「光憲(左京亮)」は崇徳側に味方するのである。そのため息子は父の逆鱗に触れ真鍋島へ流されることになる。また崇徳院は仁和寺での幽閉からやがて讃岐へ流されることになった。

この保元の乱から間もなく平治の乱(1159)が起り、今まで権力をほしいままにしていたが、今度は、逆に信成は権力者の立場から放逐されることになる。ここで人間関係を記述すると、信成の妻は紀井二位朝子(紀伊守藤原兼永の娘であり、後白河の乳母である。信成と二位朝子の娘が阿波内侍信子

である。信成と二位朝子の娘が阿波内侍信子



平治の乱

である。紀伊二位朝子は阿波の出身である。

一方、白河法皇の養女が待賢門彰子であり、鳥羽の中宮に入り、崇徳天皇を産む。しかし実の父親は鳥羽天皇ではなく、白河法皇と噂されていた。そのため鳥羽と崇徳院との関係は疎遠であった。この待賢門を慕っていたのが佐藤義清、のちの西行である。

一方、真鍋島へ流された信成の息子である光憲の直系が真鍋四郎祐久ではなからうかとされている。

また阿波内侍信子は、阿波の美馬市にある「願勝寺」中興の祖と言われ、この寺の第13代目の

僧「忍海」は、一の谷合戦で五郎と同時討死した真鍋祐宗の子「宗千代」と言われ、讃岐から阿波に入った人である。

この信子はその後京都に入り、建礼門院のおそばに仕えて隠遁生活を共にすることになるが、後白河院が白川の里へ建礼門院を訪ねてきたおりには内侍信子が最初に應對している。お互い高齢となった姿の再会であった。お互いが運命に翻弄された過去を回想して、涙の乳兄妹の巡り合わせとなった。

* 信子の母は、後白河の乳母であった。

* 阿波まなべ会会報 第73号

真鍋 修

* 崇徳院関連：全国会報第40号 参照

* 平家物語：全国会報第65号 参照

(二) 大塩平八郎の乱

江戸末期となった頃には徳川幕府も爛熟し、幕府体制も財政的な落ち込みを迎えるが、民間では商業資本経済体制により江戸や大坂では豪商と言われる商人の力が強くなってきた。幕府の農業に立脚した



大塩平八郎

経済体制は脆弱なものになっていたが、反対に商業資本体制では付加価値創造や新規商品の開発など柔軟な世界になってきた。勢い、農地での作物も米から綿の栽培に移行することになる。商人は綿製品の新しい分野を目指して、田地に綿栽培を進めるのであった。大阪平野は米から綿作に暫時変更されていた。また米についても価格の高い江戸への販売移行を考えても不思議でない。しかし大阪の庶民は高くなった米を買わねばならないのである。大坂上方では需要と供給が均衡しなくなり、庶民の生活が成り立たなくなり苦しくなるのであった。

さて何故大塩平八郎の乱がおこったのであろうか。この時代は賄賂の横行する時代であったし、風紀も良くない時代であった。いまでもそうであるが、支配層はほとんど家格による

固定的地位の世界であつたから、事象については前例の踏襲で実行するから進展を見ないのである。為政者の世界では儒学や朱子学の観念的問題であつた。

このあたりから外来思想の陽明学を採り入れた知行合一という実践行動の時代が要求されてきていたのである。この実践的学問を評価する機運も出てきた。閉塞的な現状を打破するための学習塾も人物も出てきたのである。大塩平八郎もその一人であり、役人生活の中にありながら塾を開いていくのである。当時は今という兼職も出来る余裕な時間もあったようである。下級武士や町役人・商人の子弟、そして裕福な自作農の子弟などが塾生として勉学に励んでいたのである。大塩の塾は大坂で大変人気のある塾となっていた。

しかし当時の大坂周辺においては、米不足の状況、賄賂の横行、役人の不正など為政者側の不埒行為も横行し、乱脈が目につく時代になっていた。大塩平八郎は生真面目で、厳格無碍なエネルギー的な人物であり、正義感ある人物のため、とうとう

う堪忍袋が切れたのではなからうか。

この大塩の反乱は統治側権力者や通常人にとつては由々しき問題であるが、俯瞰する視点を持つ文明動態的な方からすると違った見方が出来る。領域内のコメは唯でさえ生産量が落ちてきて少ないのに、あまつさえ値段の高く通る江戸へ米を送られるのであるから、米の価格は地元でも高騰するので庶民はたまつたものではない。また役人の不正や異教徒の不興行為、賄賂の横行など社会環境の悪化はひどかつたようである。

この大きな事件の原因を追究するには、単なる表面的なものを観察するのではなくて、多面的な観察も必要である。為政者の政治実体、農業生産品目、庶民の暮らし、商人の経済活動、外国との交流など、現場、現状の実態把握が大切である。一方向性の見方や現場主義でない対応では、庶民生活の実態把握は難しいのではなからうか。現今においても現場を知らない高い目線からの対応では、実態の適切な対応は出来ないように思

うのである。大坂での「大塩の乱」についても見方の視点を変えて観れば、自ずと評価は異なるものになってくる。

この大塩平八郎の出身地について、従来は大阪の出身であると言われていたが、現在では阿波の出身であるとする説が定説になっている。また、京極多度津藩の家老である林良斎は大塩平八郎(大塩良斎)の弟子であるため、恐れ多く謹慎せざるを得なかつた。

(参考資料)

*天保の青雲：育出版センター

岩佐富勝

*阿波まなべ会会報第54号

真鍋利夫

*多度津文化財保存会会報第21号
—幕末の多度津陽明学周辺—

(三) 庚午事変(稲田騒動)について

徳島藩は、そもそも天正十三年、豊臣秀吉の四国平定の後、藩祖蜂須賀家正が阿波国十八万石を拝領したが、元和元年(1615)大坂夏の陣の活躍により徳川家康から淡路国七万三千国が加増され二十五万三千石の領国が確定した。一方その時

の筆頭家老の稲田示植(稲田二代)も加増され、美馬郡ほかの西阿波と新たに淡路の一部を加えた一万四千三百石を分給され洲本城代に任命された。

稲田家は美馬郡の猪尻村(美馬市協町)に屋敷会所をかまえていて、家臣もこの地方出身者が多く、禄高も少ない者が大多数であつた。そのため本藩の武士からは「猪尻侍」とか「浅黄者」と蔑視されていた。しかし黒船が接近する幕末にあつては、稲田家臣は海防の職務を命令され担当するようになってからは、西国の武士たちと交わるうちに見聞が広がり、幕末政局にあつては尊王攘夷運動に影響されてゆく。しかし本家藩の方では十三代藩主斎裕は十一代将



徳島藩士が襲撃を前に記念撮影した写真

軍家斉の子供で、養子に入つた人物であつた。十三代藩主が死去して、十四代茂韶(むつあき)が藩主になつてからは、それまでの公武合体派からは藩論も尊王攘夷派になつていく。

しかし外国からの侵攻に備えて各藩の対応も現実的になり、藩論が分かれることになる。徳島藩においては、特に稲田家の家中は猪尻侍とか言われて蔑まれてきたし、蜂須賀家の本藩家中では、新政府では新政府の藩兵並びに士族となつて国から家禄の支給がされた。しかし稲田家の家臣は新政府に貢献していたのに士族でなく卒族とされ不当な扱いをされていた。そのためこの差別撤回を強く申し入れ、旧知の三条実美や岩倉具視に嘆願し、淡路を洲本藩にすると分藩活動を開始した。この事が庚午事変の最大の原因と言われている。

この稲田家の旧家臣が徳島藩や明治政府に対して強く淡路分藩運動を展開したこと、徳島本藩の士族の間には、洲本を中心とする稲田家臣に対して強い反感が出てきた。このため旧阿波藩士の有志が明治三



年四月二十日新政府に対し分藩要求の阻止と誅伐を迫る訴状を出したが受理されなかった。政府や徳島の地元関係者で解決を図ったが上手くいかず、同五月十三日阿波と淡路でほぼ同時に旧阿波藩士側からの襲撃行動が開始された。この決起行動は徳島藩内では岩倉具視の使者の仲介により中止されたが、淡路城下では最悪の事態が展開された。稲田側では自殺者二名、死者十五名、ほか負傷者の発生や長屋十一棟の焼失など大惨事となった。

分では最後の切腹になっている。この後は稲田家旧家臣の士族籍編入が認められるとともに、稲田九郎兵衛並びに元家臣たちには北海道への移住・開拓が命じられた。移住先は日高国静内郡と色丹島が指定されたが、移住が終わるまでの間は兵庫県への所属替えとなった。そして現在では、淡路は兵庫県へ所属することになる。今に想えば徳島の支配領域が幾分小さくなっているのは残念なことである。(参考資料)

*阿波まなべ会会報
第75号、76号 眞鍋 修

(四)歌舞伎中村座のルーツは阿波

「四国こんびら歌舞伎大芝居」は今年再開され公演の運びになっている。かつて2009(平成21)年に、第18代勘三郎が座長として琴平に来演のおり、初代中村勘三郎の父とされる中村右近太夫重勝の墓所がある徳島県三好市池田町の桂林寺を訪ねている。自分のルーツに以前から関心を持っていたようである。

そもそも中村右近重勝は、蜂

須賀家が阿波国に入った折には名古屋中村郷から随伴して入国したものである。重勝の父重友は、秀吉の家老七人のうちの一人として重きをなしていた。阿波に入った重勝は池田城の城代などを務めていたが、大坂冬の陣で討ち死にしていた。その墓が前述した寺にあったのである。

この史実については、平成14年8月1日発行の「阿波まなべ会会報第43号」の3ページの中に詳しく掲載されている。この中では、大坂冬の陣で構成された陣容が明記されている。中村右近は先鋒(銚)手右隊に構えていて、指揮を執っていた人物である。半役と明記されている。上下194人の隊を指揮していた。この隊を指揮していた太夫重勝が阿波に入った初代の人物「右近太夫重勝」である。

この墓に刻印されていた家紋は「角切銀杏」である。このお寺に墓参した第18代中村勘三郎の家紋も同様であったことから、彼の先祖の墓であることを確認したのである。この墓前でさぞ深く首を垂れたことであろう。

眞鍋國六 記

職務異動のお知らせ

関東地区のまなべ会において担当異動がありましたのでお知らせいたします。

- ・東京まなべ会 新会長 眞鍋 武(新任)
- ・同上 事務局長並びに全国女性部長(新任)を兼務 眞鍋美紀
- ・同上 顧問 眞鍋尚孝(前会長)
- ・神奈川まなべ会 会長並びに事務局長(新規)を兼務 眞鍋藤正
- ・千葉まなべ会 新会長 眞鍋元與(新任)
- ・同上 事務局長 眞鍋明広(新任)
- ・埼玉まなべ会 会長並びに事務局長(新任) 眞鍋 透
- ・静岡まなべ会 新会長 眞鍋 弘(新任)、事務局長を兼務



叙勲受章のお知らせ

本年1月1日付で、本会の特別顧問をされている阿波の眞鍋修氏が瑞宝双光章を受章されました。受章者は長年にわたって徳島県中学校教育に尽力され、徳島県教育委員会指導主事、徳島県並びに四国中学校体育連盟会長などの要職に就かれ、美馬中学校校長を最後に定年退職されました。退職後も地元美馬町の教育委員長や教育長に就任され、合併後の美馬市初代教育長などを歴任され、長年にわたり地域の教育行政に貢献されました。

公職引退後は、第三代阿波まなべ会会長としての会の活性化や発展に尽くされました。さらに全国まなべ会においても第八代会長として鋭意業務に精励され、現在も顧問に就任されています。ここに会員一同、衷心よりお祝いの意を表しお慶びを申し上げます。

三原マジックの伝承

(三原・中西・栗山)

昨年のWBC大会では、日本は立派な野球手法で優勝を飾り世界の注目を浴びることになった。大谷選手の働きも大きかったところもあるが、この日本軍団を統率した監督の采配がまた大きかったのではなからうかと、世間の耳目を引くことになったのである。

大会で活躍した選手たちを

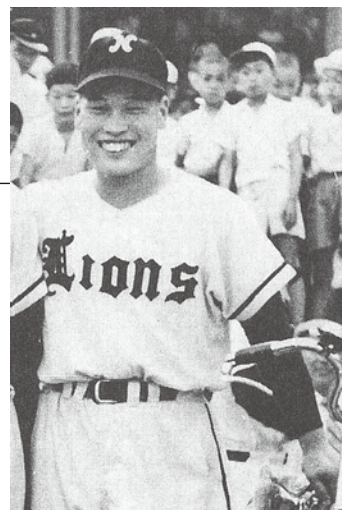


昨年のWBC大会で優勝した日本代表

という郷土の有名選手であった。現役時代の中西太は西鉄の主軸打者でありプロ野球界においては、当時怪童とも言われ素晴らしい実績を残していた。しかし監督を始めたころには大変難儀していたようであり、高松一校時代のチームメイトが栗山に居たところには、彼の親友(松尾氏：キャッチャー)を訪ねて来て、監督采配の苦しさで胸の内を吐露し相談を持ち掛けていたようであ

まとめた監督は栗山英樹氏である。日本ハムの選手に所属していた現役時代には、無難な活動をしていて左程脚光を浴びては

いなかったように思う。然し当時の日本ハム監督は、中西太と



1954年のオールスターゲームでの中西太

る。
* (松尾さんは、当時わたしの職場の先輩であった)。
やっと日本ハムの監督に就



西鉄監督に就任直後の三原修

確かに政治や団体の組織の指導者の心構えや人心掌握などの今で言う「組織マネジメント」に言及しながらも個々人の性格把握など

任した頃には、義父であった三原修監督の極意を体得したようであり、彼の人柄や野球の極意を知ったことで采配にも落ち着きが出来たのではなからうか。この時代に栗山英樹選手は中西太に出会ったのである。昨年のWBC大会における栗山監督の栗山マジックは、三原修監督の極意・思想哲学を源泉として中西太に引き継がれ、そ

して栗山監督に継承されたものであろう。
ところで筆者が学生頃の昭和三十五年に大洋ホエールズがセリーグを制覇して優勝したことがある。大洋はこれまでの六年間は、セリーグのチームで最下位であった。しかし、この最低チームを三原監督はたったの一年で一気に優勝に導いたのである。世間の人は大変驚き、三原監督の采配に大いなる関心と興味を寄せたものであった。
この時の学生時代二年次の政治学講座履修の期末試験の出題問題に「大洋ホエールズの優勝について述べよ」が出題されたのであった。この出題問題は政治学講座の半田輝雄教授がされたのでした。出題問題に大変驚くとともに、大変面白い問題提出と思ったものである。

に言及して回答することを要求した設問であろうと考えられた。どのように回答したか今は忘れたのであるが、先生が期待した回答案件に近いものであったかと想っている。

また三原監督は大洋ホエールズに移籍する前年には西鉄ライオンズを指揮していた。当時セリーグの覇者巨人ジャイアンツとのセ・パ雌雄決戦における三原監督の采配は今でも忘れることが出来ないのである。この時の試合では、西鉄が既に三敗していた後がなかったのである。雨により試合は一日順延となっており、第四戦目は西鉄ライオンズが勝利し、その後三連勝によりこの年には西鉄ライオンズが日本シリーズを制することになった。このシリーズでは稲尾投手が連投し、「稲尾様、仏様、」が流行語大賞とも言える状況であった。この時の三原采配は選手個々人の性格や心理、空気の読みなど熟知したものであった。立派な采配であったと評価されている。第四戦目は雨の降った日の翌日であった。雨の日後の試合開始を一日順延して稲尾の回復

を少しでも図ったことが勝利の大きな要因になったとも言われている。巨人の水原監督は、試合は出来る状態になっていたのではないかと三原監督に主張していたらしい。

三原氏は先の大戦に出征していて、状況把握に優れていた下士官であつたらしいのである。この厳しい戦況の中で想定される予測の把握、そして想定結果に対する対応力が大切である。これらの技量を実地の現場で体得していたと思われるのである。いわゆる現場主義から戦術を学習習得していたのであろう。部下を生かす手法は非常に大切な理念である。この戦時体験による知識が智慧となつて後々の行動規範になったのではなからうか（実地主義を学習していた。トップ指導者にとっては、実地の現場状況から体得し得た知恵は大変貴重であつた。彼はまた優秀な頭能をも持ち合わせていたのである。

これらの緻密さは三原修が残していた覚書のメモ記録が後々多く残されていたことから判明するのである。天才の陰に努

力ありと言えるのではなからうか。真に誠実で目標を持って邁進し、しかも他者に愛情深い態度で対応する人は大変魅力ある人物である。部下である他者もこのような上司には心底から魅惑され発奮するであろう。三原監督は、それぞれ部下たちの資質を把握する才能を持っていたようであり、心の機微をも捉えていたから組織は一つの塊として機能したのであろう。昨年春のWBC大会を制した日本チームの栗原英樹監督の隠れた努力の痕跡を観察してみると、三原マジックの真の後継者ではなからうかと感じるのである。実績の裏には、その人の大きな努力の結晶が隠されているのを発見するのであつた。



日本代表監督時の栗原英樹氏

ついでに申せば、先述の半田輝雄先生は筆者の学校を定年退職後は、岡山市にある就実大学で教鞭をとられていた。その頃私の娘もこの大学に入学していた。大学の学生寮で生活していた。当時学生寮の楽しい生活情報について評価する番組のなかで、評価員の一人が半田輝雄先生であつた。長いプランクの後で、またテレビで尊顔に相まみえることになるのは、いやはや一期一会の関係を経験したのであつた。名物教授で大変親近感を持ったものであるが、何分筆者は転勤族であつたため、お逢いできなかったのであるが、娘を介して今でも想いでのに残っているのである。

真鍋國六 記

お知らせ

週間「日本の島」——真鍋島——が発刊される

今年の2月20日に「日本の島」という週刊誌の雑誌が発刊された。

この本は週間ごとに発行されていて、今回は108号として出版されておりその中に私たちの心のふる里「真鍋島」が取り上げられている。

この中で、「真鍋水軍ゆかりの島は全国の「まなべ」姓発祥地」と掲載されている。また、「源平合戦でも関ヶ原でも活躍を続けた真鍋氏」とも書かれている。

かような表現により、達筆な文章と多くの写真を織り交ぜた構成で、興味を持たざるを得ない雑誌本となっている。一読をお勧めしたい。



真鍋水軍ゆかりの島は
全国の「まなべ」姓発祥地

島から日本が見えてくる
週刊 108
2024/2/20

日本の島

真鍋島
瀬戸内海・エリア【岡山県】

夕日美しい西行法師に詠まれた島

リ客に人気の「あたたかい」島 平戸島の北に横たわる漁業の島 民宿の送迎船で渡る島

阿多田島 瀬戸内海・エリア【広島県】 度島 九州北部エリア【長崎県】 横山島 太平洋エリア【三重県】

DeAgostini

令和4年度一般助成金の入金者名

自令和4年4月1日～令和5年3月31日

地区	氏 名	地区	氏 名	地区	氏 名	地区	氏 名	地区	氏 名
東京	眞部栄太郎	岐阜	眞鍋 敏克	広島	眞鍋 繁雄	讃岐	眞鍋 雅稔	伊予	眞鍋 孝敏
		"	安達 憲一	"	眞鍋 一豊	"	眞鍋 洋逸	"	眞鍋 伸二
神奈川	眞鍋 緑					"	眞鍋規味代	"	眞鍋 吉彦
"	眞鍋 忠昭	近江	眞鍋 清子	讃岐	眞鍋 護	"	眞鍋 忠博	"	眞鍋 満春
"	眞鍋 彰			"	眞鍋 照幸	"	眞部 勝吉	"	眞鍋 典雄
"	眞鍋 瞬治	兵庫	眞鍋 康彦	"	眞鍋 安夫	"	眞部 喜孝	"	眞鍋 政信
"	眞部 武之	"	眞鍋 栄一	"	眞鍋 良博	"	眞部 忠計	"	眞鍋 秀男
		"	眞鍋 宣夫	"	眞鍋 功一	"	眞部 侑平	"	眞鍋 信夫
埼玉	眞鍋 清	"	眞鍋 善英	"	眞鍋 信彦	"	眞部 威司	"	眞鍋明紀子
"	眞鍋 寛子			"	眞鍋 優介			"	眞鍋 道博
"	眞鍋 義典	岡山	大上 宏己	"	眞鍋 正彦	阿波	眞鍋智恵子		
		"	眞鍋 敏行	"	眞鍋 光夫	"	眞鍋千恵子	土佐	土佐まなべ会
千葉	越智 優	"	眞鍋 歩	"	眞鍋 修	"	眞鍋 通康		
"	眞部 奉明	"	眞鍋 匡輔	"	眞鍋 雅秋	"	眞鍋 一子	福岡	高口 治子
"	眞鍋 篤典	"	眞鍋 直己	"	眞鍋 庄二	"	眞鍋喜美子		
"	眞鍋 弘			"	眞鍋 芳治	"	眞鍋 哲世	本部	眞鍋 護
"	眞鍋 元禄	広島	眞鍋美紗江	"	眞鍋登代子	"	眞鍋美千代		
"	大津 華子	"	眞鍋 和靖	"	眞鍋 明男	"	眞鍋 光信		
		"	眞鍋 頼人	"	眞鍋 浩一	"	眞鍋 孝之		
		"	眞鍋 良宏	"	眞鍋 進				

*全国まなべ会への助成金ご援助誠に有難うございます。
今後も会報誌作りなどご期待に添えますよう努めますのでよろしくお願いいたします。

今後は財政的な出費問題もありますので、皆様共々にご検討いただければと思います。今回の会報誌発行も踏まえて、以後もご協力のほどお願い致します。会報誌の編集終了報告とさせていただきます。 眞鍋國六

また、今回作成した会報誌の送付にあたっては、郵送業者の送付代金の大きな値上げ問題に遭遇することになりました。その点を考慮してページ数を控える問題もありましたが、そうすれば簡素で見栄えのしない会報誌になるかもしれません。しかし今回、会員の皆様から寄せられる情報が多くありました。内容を削っては、折角会員様から寄せられた情報の申し出を無にすることになります。情報提供いただいた会員様の心情を無駄にする気持ちは編集人にはありません。これゆえ、このジレンマに苛まれた今回の編纂作業になりました。しかし、皆様方の期待を天秤にかけて、従来同等のページ数を確保して今回はこのまま発行することになりました。

今回、阿波まなべ会役員皆様の丁寧で念入りの計画で全国大会を実施できることになりました。阿波の役員や全国執行役員との合同会議を数回持ちまして、最終案が出来上がりました。予算の策定捻出では難しい条件もありましたが、それらを踏まえて実行するものでした。計画案は、会報誌掲載の上で皆様方へ魅力的なものにしてお伝えねばなりません。そして判りやすいものでなければなりません。

編集後記

紀州白浜 評議員 眞鍋充宏氏
阿波 理事 眞鍋通康氏
伊予 評議員 眞鍋考二氏

*全国役員の方がご逝去の折には何卒本部事務局へご一報をお寄せください。

お悔み情報
長年にわたりまなべ会活動にご理解とご支援をいただいた役員の方が黄泉の国へ旅立たれました。ここに謹んでご報告させていただきますとともに、安らかにご休息されますようお願いいたします。 本部役員一同